

③あの楽器も中央区で創られた!?

楽器と緑が育む音楽の物語

メイドイン北大江の楽器で野外演奏会

北大江には、バイオリン、ハープ、チェロ、コントラバス…などさまざまな楽器の職人や卸売商、いわば楽器の匠が集まっています。そのルーツをたどると、東横堀川のほとりにある丸一商店へとどります。日本最古の絃楽器輸入商「丸一商店」は、1937年創業。演奏家からの信頼も厚く、時には地下鉄でコンサートを開くなどして、北浜界隈の老舗として知られています。

その丸一商店から独立した馬戸修さんが、北大江でバイオリン工房のLiuteria-BATOを開いたのが1979年だといふから、もう30年以上のこと。さらにその後に続いたのは

が鈴木弦楽器の鈴木英俊さん。以来、仲間が仲間に呼ぶというような形で、青山ハープをはじめ、山本ストリングハウス、弦楽器FUJIYA、中川弦楽器、ソマムミュージックといった楽器の匠が北大江に店を構えることになりました。馬戸修さんの息子にあたる馬戸一さんはそのあたりの経緯を尋ねると、「丸一商店さんで修行した人がたくさんいたこともありますし、北大江は緑が多くて公園が多いので環境がとてもいいとのこと。今では、北大江公園を会場にした「北大江たそがれコンサート」が毎年秋に開催されるなどして、北大江は楽器と音楽が流れる町として定着しつつあります。



日本の音楽文化を担う中央区

中央区で楽器といえば心斎橋筋商店街に店を構える三木楽器があります。ロゴマークそばに今も輝く「since 1825」の文字。文政年間に河内屋佐助さんが書籍業として創業し、楽譜の翻訳出版なども経ながら現在へと至っています。

中央区は日本の音楽文化の一端を確かに担っています。

中央区の匠マップ



バイオリンの製作販売、ユーコスラビア、イタリアなどから古い材料を輸入し、新しく制作される、例えば、本体表板は松材、裏面はメイプルの様にふさわしいものを用い、約3ヶ月かけて仕上げる、コツコツと地味な仕事をしてその技を磨いていく職人さんに敬意を表します。

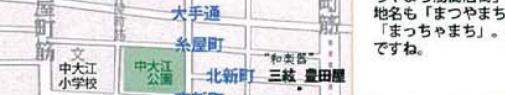
推進委員の感想



8 バイオリン
Liuteria-BATO
馬戸 修さん

オーダーメイドのバイオリン工房として1979年に開業。道路に面したガラス張りの工房では、ときにコンサートなども。「職人といえば念を入れて、というイメージですが、楽器は女性的なものなので、鼻歌でも歌う気持ちで、明るく作っていかたいですね」。

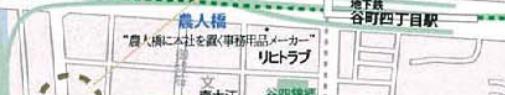
推進委員の感想



9 鈴木弦楽器
鈴木 英俊さん

マンションの1フロア全体に、工房や倉庫を構え、古いバイオリンなどを修理、販売。「古いから良いというのもではありません。ちゃんとした人が作ることが大切なことです」。

推進委員の感想



10 ハープ
青山 鉄舟さん

日本で唯一、グランドハープを製造するハープメーカー、そのショールームが北大江公園に面したビルの一室にある。「日本の丸柱から手づくりで彫りあげて作る楽器ですので、楽器の装飾もすべて後付けではなく、彫ったものなんです」。

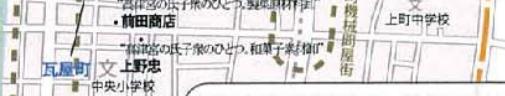
推進委員の感想



11 手作り時計
CRAFZ
秋友 清孝さん

JHA（日本手作り腕時計協会）関西の直営店として、13人の手作り時計作家の作品を販売、定期的に講座なども。「父が時計製造をしていました土地で2000年に開業しました。職人とはいえ、1点ずつすべて表情が違うのが手作り時計の醍醐味です」。

推進委員の感想



12 大理石
中家 祥裕さん

さまざまな大理石の輸入、加工をとおして、新築から歴史的建築物の再生工事まで。さまざまなイベント出店や美術作家への作品提供など。「石をもっと身近なものにしたいし、住民のみなさんと一緒にになって、まちでいろいろやりたいですね」。

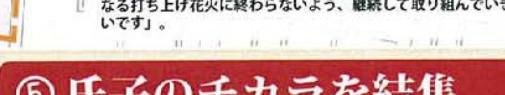
推進委員の感想



13 金網
森田 一雄さん

おもち、ざる、食材の裏ごし、種のごみ受け…金網の用途は実に多様。既製品ではサイズや網の目の大さが合わないときに必要なのが、手づくりの特注品。森田さんは、道具屋筋をはじめ、全国から依頼の絶えない職人です。安堂寺橋通りからガラス戸越しに見える店の間（見せの間）で大正時代から三代つづけてこれらを気さくな職人さんですが、跡継ぎがなく、静かに営みを終えようとしています。

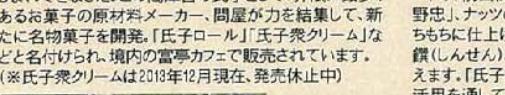
推進委員の感想



14 畳
森田 一雄さん

以前は畳表は簡草、中身は藁で一畳約30kgもあったとか。近年は藁草のカバーに紙を加工して藁草に似せたり、又、化学製品でできたりなどがあり、軽くなっただけで好崎さんはそういうものは使いたくないとのこと。私は使いら畳を無くすことは心のよろこびがなくなったと思う。

推進委員の感想



15 蓋
木村 一裕さん

高津宮の氏子として、菓子業に携わるメーカー、卸問屋が数多くあることから、「氏子ロール」などのお菓子と共に開発。氏子の力を集積した、新たなまちおこしの形として注目されます。「単なる打ち上げ花火に終わらないよう、継続して取り組んでいきたいです」。

推進委員の感想



16 壁
好崎畳店
山名 孝一さん

戦争で焼け出されて三休橋から現住所へ。叔父が奈良・八木で畳の材料問屋をしていた縁から疊屋を開業した。

推進委員の感想

17 高津宮
木村 裕一さん

高津宮の氏子として、菓子業に携わるメーカー、卸問屋が数多くあることから、「氏子ロール」などのお菓子と共に開発。氏子の力を集積した、新たなまちおこしの形として注目されます。「単なる打ち上げ花火に終わらないよう、継続して取り組んでいきたいです」。

推進委員の感想

18 氏子のチカラを結集
高津宮の新名物ができるまで

氏子と神社のコラボレーション

86年の創建、大阪市歴にも記されている高津宮。江戸時代は有名な名所としても知られ、また上方落語の舞台として登場するなど、大阪の「高津さん」は全国的に親しまれています。この高津宮の氏子として、界隈に数多くあるお菓子の原材料メーカー、問屋が力を結集して、新たに名物菓子を開発。「氏子ロール」「氏子衆クリーム」など名付けられ、境内で販売されています。（※氏子衆クリームは2018年12月現在、発売休止中）

まちおこしへ発展「氏子菓子祭り」

小さなお菓子からはじめて、現在では氏子菓子製作委員会を立ちあげ、秋には「氏子菓子祭り」を高津宮の境内で開催。上記社に加えて、より広く界隈の食品、飲食関連の店舗や企業までを巻き込んだ、まちおこしイベントで发展しています。こうして生まれた新たな名物が今から何十年、何百年と歴史をつづっていく想像すると、これほど頼もしい話はありません。

推進委員の感想

まちおこしへ発展「氏子菓子祭